佛諧天爾波抄

四

入
利
1264
4

俳諧天尓波抄巻之四

早稲田大学図書

○十九家下

○志家 此ニハ世ニ助字トイフ志ナリ。助字ナラヌヿ。コノ注ヲミテ知ルベシ。過去ノ志トイフハ下ノ去倫ニアルコレナリ

志 しゝ。つがしらの部へとゝやく。倫の部へ出しゝるこゝろのしも。世ゝ部へ。ゝ。ゝ。ゝ

[illegible]

○何[illegible]

拾一　初ざくらをたづねてよしの　芭蕉

かりこころの集中例てず

○乃家

の　ふりく伝語[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭　抱上ゆるの　小侯を千ゝ　利牛
猿　なゝ　なりし草一　猿のなくく　昨水
続　初あゝ　畠の人れりけふり　支考
炭　竹の皮　雪踏ゝ　雪る　立の雪く　石菊
員　降辰も　入歯ゝ　寿のさくかく　冬文
春　内侍のゝ　仲ゝ　乃眉の図　荷弓
猿　猿川の猿ゝ　せかる　秋の月　芭蕉
日　一ト吹き　自の　木の葉ゝ　日
員　大ぶゝのゝ　ゝ　くれあ　ゝ　荷弓
猿　白玉の雪ゝ　ゝ　ゝ　猿　東来
日　蝶のゝ　一夜　ゝ　蕙の　支幾
日　堤ゝ　田のゝ　ゝ　ゝ　元孤

日　飯やの七尾のゝ　仏ゝ　日
続　庶行ゝ　ゝ　ゝ　支考
員　氣ぶゝ　ゝ　ゝ　野水
猿　年のゝ　れ　袴のゝ　ぶり　枝風
冬　五ゲン形　れの　畠ゝ　友　杜国
員　狐つ　ゝ　ゝ　ゝ　猿人
瓢　着物の　ゝ　ゝ　ゝ　里東
日　鉢ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孤頃
員　鐵の　ゝ　ゝ　ゝ　荷弓
猿　持ぐ　ゝ　ゝ　ゝ　蜂龍

そのうちのうに、あるいはあるいは、ちいさなんく
うしくぐれど、中ごろのそのうちにあるべし。この川なる魚どもの
うち、玉形ちいさなる島ふるといふるを、吹葉をうえたる島、むかし
ゆうに、そこにある人の邪気とあれる島ふりくさもんく、五形
草ゆうらあるやうるにく、これいくいくゆゆべ。すべく天の川の
ゆうり出ふた。かつてくるの義はしあるあるれど、今うまくく
これとい字り。○まさきもの、ものこもしたるにふるべく、並日面の
つうしゆうさべくもあり。されど上古中古ともすくるの事にく、近
ちかちかおられくるかり。上古ちかるるもの、ものこもい字よ
ゆすべく正面にゆるべ、中古ちかるるたる正面とのいし
こくつむとする事よ。上古のそこにものこもやべ、さかく
異ものつうり。全く詞のくにいひつきむしのくく言葉と黄さる

うあし。豊勾ちゆ字なれど。異例をつかし。その字のぐくふ羅と
ふつれべく。これとくくくくも。中古近古の正体とうなるる
とつつくく。んあるん人を。かの黄ゆ猪黄の序よくくちべ。
ものくくる。上古を貴べとゆ人今。うくべのおゆ体なる詞とる
移べべりにく。この幻術とうる所くんつく人かし。俳諧くゆ字
なれば。とく言葉とも○せべれど。かくとつくんかんとう
つくさ抜ん

荒　人うちむ　みと陸の塩干か　友重
日　雨の月ぞ　ここるかりの夜の月　旅人
日　月のつくう　とうとう詞の柳ゆる　空水
日　月ゆゆ月　ゆくつげかりの柳うれ　投遊
員　蝙蝠　みぶく月の柳か　荷芳

続

月鴨や東風つまてくの隙漏し　鈞等

瓢　秋ぐれの舟をこわがる浪の音　曲水

々　小の御門なれしあけの春　芭蕉

いづまも・あるいつまでか・詞あるを・皆のれらしもやそもひ・又そ
れの詞よりくくしのこいつかり・さんだけ風のつくるもの後の
柳はとまる・ウシロニスルとうつをのこるや・秋風の雨を
こるぐとまる・ツヨクスルとうをそだるんで・いづまもかるう
ちくつりのかりと知るべー

○みよりるのと差づけく・如くとうつるのあり・これ上句
よりまるまるのくよりしるし・物よりるはいりそそ

春　陽炎のもえるうちるまぬにく　芭蕉

猿　雨の形どりの傘半迅速　路

員　さつ戸屋のむれく浪のり女宮　狂人

猿　世中は鶺鴒の尾乃除まる　九兆

○手・の四メとく・一首の終とのうつるのあり・京手・同うつり
ゆくり人のれとあるうづひ行えし・いづまも・ホ上とんの差つくれ
なるく・ゆく終とのこいふるし・歳のとえ例みず・これつうに
くやるのつて手ようまるるれど・むつうにたるひく
つのくれざりくるる・かりくむつうなる事とはつ波・ど何ガドウアル
とうつづか・ドウアル何がこ例ようつうみだるうまし・例のるのるて上る御ど
ようるどと

づ　がこいつかく・上の式の差るつ粗ようづくく・その物ようくと
うくくくんかりのこいつ時く・半ぐるのう後の持今ぐくくくと
づくるのの他ようくるとさくまんかれど・よんえてつうべー

瓢　芋掘り弓紀の関まで　頌子　沾頭

集　なさうるの雨や西施が合歓の花　芭蕉

春　杜の木に高日が門さらりとく　雨桐

炭　祖父がくの火桶も年ぞりぬ　其角

冬　口東の書が捨る月をとく　貞五

員　陽ぞいよぶし　分人

続　かれが事一子とよるく捨の中　芭蕉

同　除がかくれる祖父の備蔵　馬莧

猿　けまるる霊日が男居かりにく　史邦

同　花ちらさまた西あが衣をく　芭蕉

同　ゆるゆくらがえるこうが　鳴石

同序　うれが序よそのんれるく　其角

続　鞠ぐ来くおれるよずよ梧　文考

猿　摩耶ぐさりるのこうれる　野水

瓢　数的つくまる　ねが早ロさ　曲水

員　立日が素よ　かれてうれ　胡及

猿　丁雑が荷ものこぼこう　凡兆

員　そのべよ立くるるひが　義子

炭　富匠が撫の小節を抜うのく　孤屋

猿　ちぶるるが瓜紅のこう雪ちけ　探丸

荒　わかざり伊愛が素罪ふんを　雅　其角

同　山ぐつが葉山子つくつくりれり　守五

同　おく天が（イチハラ野ニテ）や小町（ヲ）が骨のたるよ　鈴屋

続　まち面や光うれるよ　鍛治が遊　桃子

月　里のあが慈しげなる　支考
日　小米も奈良のくづれや瀧ぢかか　百手
猿　夏草やつはものどもが夢の跡　芭蕉

これらはいつれ一時の興のごとくなれども、ほゆるの句也。ほとゝぎすのなく
にしく俳諧のがかくるまゝ。今此句こゝにあらはるゝ。
あるべくかとゝ雅俗のつりあひたるまことにてこゝがしたゞ
て、その上の句に俗用あるやうにて時はゆるるとゞ下句の句
ようとすれば、かゝるなれば、これ俗語にかゝるのわくをてい
くられのしはりまこの上句に「孫が」ゝる私の俗語とも。
のとがとゝかりもつかず。よくけりをしらべ。拙文ごゝ。らの俗
語をあたゝ。今此句こゝ。その俗語がうまくまぎれ
うくゝ孫るれど。孫をうまくるがのよゝうとはりひとり。これをもて

俗語にゝうとゝつかゝ。雅俗まゝ。ほゝるのとゝ

炭　雑炊の鞍とみるやはつがくれて　野坡
月　叶ふる　帰りく　月が雨ふる　梨半
月　馬ゝなるゝ　ゝゝ　人参　孤屋
続　花の中ゝ　獅子の方ゝ　里圃
月　荷ゝ　ゝ　面る　馬つぎ　日
炭　祈ゝ　ゝ　土ゝ　筋　野坡
月　堤ゝ　ゝ　娘の世ゝ　梨半
続　夜ゝ　ゝ　ひ　月ゝ　里圃
月　山ゝ　ゝ　ゝ　尾　白　二谷

ゝ
ゝ
ゝ

とんぐぢなり

○ 遍家

【へ】 へしこく宮角をたてさうこへむしうしするんなり。萬葉集にも方の字をも。へとよまるる所多し。行方かたどうめさう。ほ世ゆくえとか久ハ仮名誤レリ

ゆくとつ何とらびくくたる事あり。ほ世の人さられをうれ口くず。手かどくまただ。へとつぶる所をもゆくとむかり。これ。ゆえ雅にて。へを伝なりゆうんくうぶたし。伝てくゆくくゆくくゆく

続
炭
日
続
炭
日
甄
炭
続
集
日

○良家

[illegible]
[illegible]
[illegible]
十里だうのようく出りて
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬　こがらしとのべの花ばなる町　荷兮

春　うぐいすや神輿うく里　重安

〃　蛙のこゑてゆしき花ぬれぬ　野水

〃　立低のこゑ　雪のやうく　狐人

〃　鶯ち白河のこゑとなる夜ふ　李孔

〃　昊見えさ都のこゑ一日ふる雨　野水

荒　そなの[illegible]（素堂ヘニカリテ）けるけつくしる蓮のこゑ　狐人

集　月のこゑ西ふ角ゆるふるうく　芭蕉

いづれも[illegible]

[illegible]

[illegible]

だうり

だうりの花は上ゑつづく。かの柳とほうるなとにて

ほうる雨かう。のこゑとだうりのこゑ。

員　牧のもるだうり　[illegible]のような森　海人

炭　損だうりしく[illegible]　松風

荒　これもく[illegible]だうり花のこゑの山　東室

〃　今[illegible]の蒸れ　芝之

〃　書だうりの[illegible]　泉

〃　雪のり中川[illegible]だうり　[illegible]

〃　雨のよも下だうりゆく　[illegible]　合歓

月　春ちかく桑の葉だらけの行　不知
月　ちらしまだらに蔓ゆるしられず　傘下
月　枯あし春まるだらけみる夜野外　生林
炭　徒持だらけ　そらぬる　月　野坡
荒　学ちらばかりのうらみ　影ちぬだらけ也　蓬子
猿　やぶの雪　柳だらけ　姿外　揉丸
炭　月　もしらけあげ　城のうらだらけ　利牛

四句どもの心。貞室が若さるる句言葉也。
で。何ともんの心。いとふ句のさるれどさまあず。上こうれなく
さらにこれ。自然とうるびもくに口頭とのうるこうかなく。まおの句
をまぶしあるり行雪まれだ。だらけの羽とけて。松風が損だらけ
とうる句也。そのうえ。損徳のつれもひとふうもくだらけもつる卸し。

寄こうこうだらけうしうこうこうこうこうこのこうこうこうこうこれで「のこうこうこうこうこうこれで「のこうこうこうこうこう

第四ごと川のるぐるま　垣千代　治徳

そも〳〵や他のほめうたもしらで　芭蕉

これかゝり。古てきこゆるは。ぢうりとゝ。前句より。古言をこゝろ。うつ詞あるべし。こゝろ別なり。うあり。伝をこゝろ字とゝ詞にあるべ。よのなかのことをかなどいはれや

まで

まぐるまとゝ詞。これまでぢうりとたるべ。

ゆるかぎりまでいはれやすき詞。たゝこゝ。限をとゝ詞。それどゝ。ほそ。さることゝ。ぢうりとゝ。

はさくあるべ。うれとゝ。ぢうりとゝ。限をとゝ詞。ぢうりとゝ。

くよまくいはれぬべ。詞をすくいはれぬ。

そのくるあるのあるのあるの

荒　八重葎奥ふかくなる秋田かな　杜国

こゝろ〻けふは二重三重あるくなり　芭蕉

ゆく奥ふかくなるのみなり

荒　いざゆかん雪見こころぶかきまぐ　芭蕉

月　咋まぐ　所抱て月見るゝ　任他

月　鶏頭の寺てかたるまで　紅葉　市川

続　芥子蒔て烟るまぐゆゝん月見ぶ　空月

月　二見まぐ　彦根ぶめる月見ぶ　支考

冬　野菊ふでらぶめる蝶のもとれて　芭蕉

瓢　双六の目をのでくるまで　春夕　日

炭　祭まぐ　うるぶかくて花ぶ　野散

貞　八日の月　けまぐ　入まぐ　舞夕

拾　なるうくるまぐ年のくれ　節麦

続　うるぶ　柿の海まで下駄の跡　魚日

炭　ぶまぐ　水ぶ　あやめ　桃隣

月　蝉のゆまぐ　相のひろぶ　日

冬　ふぶふまぐ　はぶの水ぶ　舞夕

瓢　湖のさ　柳の下まぐ　和なり　涼顔

桂　麦出まぐ　鶏まで　山ぶ　紅葉

月　かぶ　ぶ　かこのまぐ　知人

月　魚の骨ふ　ぶのぶ　芭蕉

炭　ふぶ　ぶまぐ　ゆる　入舟　桃隣

この梅雨ぶ　の　ぶぶ　ぶまぐ　ぶ　ぶ　ぶ

[illegible]

世のうたがひなるべし

波かり。これ同じ待賢門院の[illegible]

この歌ひとつ[illegible]やり。これワが父の見解。所法

物のてをのくるしなかり。これ[illegible]

だえ

○陀尓家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猿　和歌人より　石部山　和月

歌　みりくほどの　カさく　邪き　蹟

荒　すびりさくすぐ　ゆ　えの　蒙俵　菖蒲

こわくいづまそぐこにある白どもかち中まも菖蒲が白ハ

の蒙俵くたちおりしかちく天王殿を殺しくるひすや　すびり

ぐこすぐこつく　まつく蒙俵かどくこつるとゆちん者の

てこさかわぐや　くさくに絆結ぬもみくんぐ　芭蕉白

筆　嵐雪が西二蒙さ下るのりくさ人ゆくれやくこつ白　まこ

こわくこ上るるわぐこつんるれで　此引さく伝説のさ　ぐ　菖蒲の

白づくわくこすぐれるるのかち　くこぐくこちりぐ

○余利家

よるさ　よるさくこ　すぐく　さ　新　一慶ありく　こさちりちこ　おもし

うりす付の旨かち　三例あり　いづまも　こさちりづ事　人のちし

かけるるぐくこつぐ

○世一例　いづるちりこ

うるさくこ　ちくこ　ちくこ　ゆく　出ちり

外へ出るかどいつ特つこ　詞　伝言かつくこ

蕣　月　月　月　焼　荒

うちちりみしれも　咀のさくちり　冬杭

くるまちこ　こ人ぐ　寄る　月笛

かりのありや　初ちちりの　ゆちれ　堅水

つくく　阪中こ　まるひちち　吉江

巨燈ちり　寝ちゆく　時ゆく　夜半ち　寄芝

蕣ちりの　燈ちこ　ちりづる　ちるる　下枝

円　笑より兼ねて物つきやすの名　角淳
続　すぐし和橋より見をぐるげる　文考
荒　竜ちり和より酒とる向ちり　竜門
続　中國よりの山の吉左右　雅郎
員　くさちりも仲あげする忍ぶ丸　秋人
猿　はしぐすぎ流ちりのつるか　文章
冬　猿より硯とりうきゆくげる　芭蕉
春　岩の間より花を山里　吟水
歌　ちつより新ぬ山なる別して　新号
猿　春より花しくるきのゆしらぶ　石口
円　秋ぐや田上山乃くぐより　尚白
円　ちちくや春の山より初ちり　旦葉

円　鶯のあちちちちより山路ぶ　式之
続　七つより花ちくふきる女中ぶ　陽和
崖　与中町ちちちりる西風　初平
円　秋ぐすぎ薪の下ちちるおちく　円
春　鳥升ちより寺ちの奥の冴中ぶ　昌圭

けるどものちちく寺二例のちちもあれどもこの
ちぐぶ。よく白ちちぶちちちぐ。ちちふ茗所員外
の八分ちちちち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

◎第三例　[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭　山より冷まじ月のさし出　孤屋

荒　[illegible]　芳川

同　[illegible]　芭蕉

続　[illegible]　順礼吟社文芸

荒　[illegible]　[illegible]

続　[illegible]　一さ

荒　[illegible]　隆風

炭　[illegible]　[illegible]

員　[illegible]　[illegible]

続　[illegible]　[illegible]

猿　[illegible]　[illegible]

炭　[illegible]　[illegible]

同　風や沖[illegible]　其角

同　[illegible]　芭蕉

[illegible]

かう

引とゝまる。でたちの侍の人あれどもさくあら
ず。古今集の詞にてもてはやされたる也。中昔のゆどりハ上の方雅也
ゝやつ共ハ相応なれども辛崎の松ハ是あり共
ゝうなどゝのくまのくみえあり。そもそも中昔の詞ハかく
のごとくなれるをゝるべし。これひとへにうゝびのもせるさうり
ゝなれるよりのるのかり。よりくゝ引とゝまる也。ゆにて
ゝくつもぬぎ。いくでゝ自在の変化をおさん。是也。ぬぎだうを
みがくゝとなれるのおげんべ。ゆゑ神そうおろ
ゝるの事かりう。これ二例あるく。肩うゝ裝うゝとゝ肩
うゝ相応をうけ裝うゝとゝひの詞をうるゆゑ。その肩
かうハ。ほ毋ゝもきつゝ也。いそゆる肩うゝ我うゝかなどのまもり。
抑このうゝとゝ詞ゝ。上古ゝ。故の字本かれゝ例ゝてよむ。早はんと。

それぐかうゝもあれ。その故をもつてゝ詞ゝ。よりこゝ
依因かどのんにく。そのものゝ体より和ゝ。ゝそのものゝ
ゝりるれだ。くゝくゝつゝ。かゝゝかまゝかゝ。引とゝ
をゝゝするんあり。これまゝはゝるべゝ。ゝんべゝ
ゝく人ゝるはゝゝゝる詞ゝんゝゝゝ。集中例ゝ。
ゝれて侍ゝゝカラゝ詞あゝゝ。かゝゝ引ゝゝゝ
ゝゝうのたゝいめゝるゝもゝゝゝゝの。
ゝゝ俳人の詞なゝ。上ゝゝゝゝ。これ
為ゝりの言ゝの。かゝゝんゝりゝゝ
中ゝゝゝゝゝ。これゝの侍詞のゝゝゝゝ。集
ゝかゝゝゝれゝゝゝゝゝ。古
言かり。ゝ三例ゝ侍ゝ言ゝ。ゝ一例のゝの侍

荒　若草うゑすぐるおごめの子まで　羽蘿

続　後ろびの内侍を今度変ず　支考

炭　うけて踊り　檀ちるかり　野枝

月　隣りもれ　嫁をよびまる　日

月　婿をよい事　孤屋

猿　股引の初うり　九兆

続　きのうわすれ　沾圃

月　山うち石ゴロ　茅をうつく　叶言

炭　賣人うつ　つくみやるて　羽色

月　川うすぐ　小船　石菊

月　瓜の花　ナンボくらい　桃隣

行平ゆく　川ゴ　ゴ　ゴ　

[illegible]

○手ぐるま。ものゆるとも訓あり。上の物うるに同家の河にく。モノ、クセニとゝまんかり。それ[illegible]

[illegible]

○那牟家

なん

これを中のなんと名づく。五倫のうちを出せる孔のかん又ゲトの六倫のうつの去倫のかんをゞくハうしとかり。これを多く文章とつゝかんにく。手ゝ[illegible]ハてすなるし。今世に和人をとくく。いかあく[illegible]るん伝るなど。いかなる[illegible]と無ぞ。[illegible]てかくべき事なるあしぞ。伝[illegible]

ワガアラハセル言葉ノ仕様ニ

[illegible]イヘリ。なんとゝ。一章一段一篇のうちに。[illegible]たき物事ゝ。なんとゝつゝる事ゝなり。[illegible]所ぞ。すべてゝこの言葉より所くしみべく。[illegible]みの混ぞ。て一文へよく持伝つる[illegible]ぞ。人ゝまのをひたりすゝ。[illegible]伝ゝ。拙作するゝ。ドウレテナとつゝ[illegible]人ゝあつくすゝんゝくゝ。[illegible]などゝあり。集中白居易ハ[illegible]

猿幻住

いくゝの伝何ぞ。勇士菅沼氏曲少なの伝文

芭蕉

ゝゝんまぞりなん

炭

序

[illegible]吟ゝより篇なりて。[illegible]

ゝわりのゝなん

芭蕉

かどみくらり。いづまもちのみてむらのさくらかはくらい。ワづ又
所さぞきぬ事とそろぶ。上古ともなりたり宣命などれ
おくみくらを

○碁登家

ごと　これて毎のんかり。頃ごろのちなく。ネビゴトニとりてみるべ
ろの答をうけうるく。信ときに所ーきこつて。これもこくだ百
ゆるもちて五六十かりんとんの外のなりと。所ごろこてて毎の頃

集　えらて四ごとの日ごとにひれ　芭蕉

同　秋すでしもごろこむけや氏蕉る　日

同　雪ごろこうれだりうもむするもが　同

○毛天家

もて　こわて。ちくのらく。ちくのらく。ちくのらく

しくとはるるあり。折結ばるよくつ

集　因幡くつづん人の脊中つき　芭蕉

○加保家

かを下

これてたび・顔鳥かごらしあり。てるたにかるる也。ふるぶ武

しぶらつ翁て。ちたくるも。ちまぶ。しくうしく体をうち

てみるとそ頂し。それぞ物のかるひしもちて持ある時。それく

ずりていそぐ。さうら。ムかりめぐぶぐ。そのものくる持くく

みるぐぐくいひるて。我ひよもれし持ちす羽ぐく。うエイヤウ文

カナンゾキウニかどい伝てくあるも。源氏物語などて。これぐ

かぐいつく。ふハちぐてかめのちきちちけんるより

荒　ゆくまもしんえぐもの野寺うく　芭蕉

続

集　菜畠に花つるぐかかる雀こうれ　芭蕉

日　寺く高くちくがかかる月ぞ　日

日　山吹の垂花　菜の花ちぐかかるも　日

空水が白うてく。野寺の廣信。移下して。りまもかくもるしやう

いまうかりといしく。けてくうるくんのくちく移をくうんまのもち。

花まあり。吟の小ぞかぐてつけく。人よまうまあく。なのげくる寺のにぶ

まひくもかるぐぐ。まくれてえさびしくくりるぐさまくと含み

ていしく神祠の白かり。されぐ移をくちくぐと。わが

んのくるのそくさ松。吟寺の廣信くよもくくくくくるくくやるく。白も

かゆくくてけくまりくれ。野くて言る。寺くら言み。そのさうしと持

くる廣さ。寺ぐかくくくくく

[illegible]

○那加良家

おがら

ながらくいふ羽。俗世にくハ。ナレモジヤケレドモカどゝの羽のごとくなるゝ。あれまれり。ナリニとゝ佐そくあるゝ羽。ゝとくで。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日　年くれぬ笠きて草のたびすがら　日
荒　枝ながら雪をうつして梅の花　舎帖
日　むかしをとこ　西施　はつかなる　越人
日　かしまがら　師走の市に買るこゑ　日
続　憐しらく月入るまでや蓮の葉　利合
日　みのうらやの霜ながら　沾圃
横　骨柴のうしれるかしらも本の雪　凡兆
日　うぐいすや宿を奪ひとるまがら　魚日
日　苦ながら花にまじるわび坪　芭蕉
続　めれ梅やもの枝ながら土ながら　荒雨
炭　帯しらべる居見ぶるまの　狐
俳　下関や地色あかしの梅の香　荒雨

まく

これをまく　まくとうたふ　まくにてうたふ　まくにてうたふ　まくにて

炭　炭ばかりにて脇をばこしかけ　吟抜
日　投うちもそこなひぶかきこと也　評曰
まことにまことにまことにかなしきことなり

○加天良家

かてこ

ぐそくこいつそ。まことにこれのそこなるにこそかてこといつくかつるんるまりらそるつをかくみるべー。信そこいつもつ。又カタくこいつんさあるこし。ひとつのこと又一事をとくこそ。くすんとこそ。これ又一事しこんのこのべをしこる況。すべみぐそこ二月とみるかこいつ事。信語つ況ぐそこ集中例みべ

佛説天命皮冊　巻之四終